

『田舎女房』におけるホーナーの役割

澤 浦 博

1675年に初演されたウィリアム・ウィチャリー (William Wycherley) 作『田舎女房』 (*The Country Wife*) は、王政復古期の様々な男女関係を通して見られる結婚に関する劇である。この劇は各々が男女の三角関係を含む三つの輪郭の明らかなプロットから成る。一つのプロットで、主人公ホーナー¹⁾は性的不能を装い、それによってサット・ジャスパー・フィジェットや老レディー・スクウィーミッシュの疑惑を招かずに、レディー・フィジェット、スクウィーミッシュ嬢およびデインティー・フィジェット嬢と情事を楽しむことができる。二つ目のプロットは、題名の田舎女房、マージェリー・ピンチワイフの都会の楽しみ事への目覚めと、夫の嫉妬によって刺激され、ホーナーの寝室で解放される彼女の欲望とに関わるものである。三つ目のプロットでは、ホーナーの友人であるハーコートが、ピンチワイフの妹アリシアに求愛し、彼女の婚約者であるスパークッシュから彼女を奪う。

この劇中、三組のカップルの結婚破綻と一組のカップルの結婚成就に多かれ少なかれ関わっているのが、ホーナーである。ホーナーの役割は、作品のジャンル分け²⁾と並んで『田舎女房』の批評上、侃侃諤諤の論議の的となってきた。³⁾ホーナーは作家代理ともいべき風刺家であるのか、それとも彼自身揶揄され、嘲笑される風刺の対象であるのかということについては意見が分かれている。小論では、ホーナーは風刺家であると同時に風刺の対象でもあるという、二元的解釈に基づき、彼の役割について若干の考察を試みたい。⁴⁾

ホーナー像を確定するのは実に難しい。「間男」(Horner) という卑猥な名前が意味する以上のものが彼にはあるのだろうか。⁵⁾ホーナーは風刺漫画のよ

うに誇張された王政復古期の放蕩者であろうか。ハロルド・ウィーバーは、王政復古期喜劇における常套である放蕩者の悔い改めや変貌が『田舎女房』にはない点のユニークさを評価し、「ホーナーの徹底した放蕩者ぶりを犠牲にしないで、ウィチャリーは放蕩者の魅力ある自然主義的肖像画を与え、ホップズの放蕩者の性格の様々な面—その精力絶倫と熱情や破壊的で反社会的な力—を明らかにするだけでなく、そのような人物が表す夢のような自由に対する我々自身の好感と反感の葛藤をも明らかにする」⁶⁾と論じている。

ある程度、ホーナーは女色以外にほとんど何も考えない王政復古期喜劇の主人公である。女性遍歴に飽きることはないようである。T・W・クレイクは、「ホーナーの行動は、収集家の興味を有するだけの女色への耽溺にすぎない。……彼の策略は道徳的に途方もなく、事実としては信じ難いが、それは道徳的で良識的なアリシアのストーリーと相容れない法外な笑劇の設定を要求する」⁷⁾と述べている。こういう訳で、ホーナーはバリ滞在の結果として自分はインポテンツになったと公言する計画を企むのである。彼はバリで梅毒に感染し、今は治ったが、セックスできないのだと言う。ウィリアム・フリードマンによれば、「インポテンツはウィチャリーが提示する王政復古期の社会の特徴である。それはまた、その社会に対するこの劇の批判の中心にある」。⁸⁾冒頭の場で偽医師に言うように、ホーナーの第一の動機は、これまでより多くの女性と同衾することであるが、それに付随して、如何にして男は自分の魅力に反比例して女性を獲得できるか、証明することという二番目の動機もある。ホーナーは一見、女性たちを反発させるであろうことが、実際は彼女たちを惹きつけることを示す。何故なら、女性たちは彼が「無害」(I. i. 121) ⁹⁾であると分かるからである。ホーナーは無害であるという評判によってペテン師の行動の自由を得、そうでなければ彼に閉ざされるであろう家々に意のままに入ることができる「都会の合鍵」(I. i. 173-174)になると予言する。こうして、ホーナーは自分の知られた不幸のために、女性たちの私室へのいわば許可証を得るのである。ジョン・ハーウッドが言うように、「この劇は名誉がただの言葉にすぎず、貞節が見せかけにすぎない世界において、最も首尾よくしらばくれる者は誰でも、最

も力を獲得するであろうし、他人の容赦ない計略の犠牲者に一番なりそうではないだろうというホーナーの仮説を確証する」。¹⁰⁾

ホーナーについては、以上の他に実に様々な解釈が提出されてきた。例えば、トマス・フジムラは、ホーナーはウィチャリーが創造した「最も印象的な才人—正直だが、皮肉屋の才人であり、話し方は辛辣で率直、節操面では放蕩で、気質は懐疑的な、合理主義者である。ホーナーは腐敗してはいないし、全く冷笑的という訳でもない。……才人として、彼は正直さと率直さ、常識、ウィット(判断力)、および自然に忠実であることを信じている。……主としてホーナーを通じて、ウィチャリーは自分の自然主義的なものの見方を表現する。この劇が世の中に対する才人の態度のウィットに富んだ、そして、しばしば辛辣な表明であるのは明らかである」¹¹⁾と述べている。

ジョン・ウィルソンは、ホーナーをウィチャリーの絶対的な理想、つまり内面の躊躇や外部の抑制なしに自分の自然な衝動を満たす放蕩者であり、偽善的でなく、結婚のような形式を敬うこともない人物であると解釈する。¹²⁾ ヴァージニア・バードサルは、ホーナーを「勝ち誇った生命力」¹³⁾を象徴するものと考えている。リチャード・ステイガーは、「セックスに反対する女嫌いの服装をした放蕩者として、ホーナーはこの劇の社会の究極の象徴であり、そのようなものとして最高の社会的順応者である」¹⁴⁾と見なす。

ホーナーをぞっとする、あるいは軽蔑すべき人物であると思う批評家もいる。ボナミ・ドブレは、彼を色欲の「気味悪い、悪夢的」擬人化であると考えている。¹⁵⁾ マーヴィン・マドリックは、インポテンツ偽装が社会の欲望を明るみに出すホーナーと、病気の偽装が社会の貪欲さを暴露するヴォルポーネとの比較をする。¹⁶⁾ アン・ライターは、ホーナーがヴォルポーネのように、「自分の紛れもない成功のために大きすぎる代償を支払う偏執狂者」¹⁷⁾であると指摘する。W・ジェラルド・マーシャルによれば、「ホーナーは衝動的な性欲に起因する偏執狂の症状を呈すると診断されるだろう」。¹⁸⁾

また、F・W・ベイトソンは、ホーナーを「恋愛ゲームのプロ」であると考え、「結局この劇が残す象徴的印象、その究極の意味という点から見ると、グ

ロテスクな、あるいは単なるからくりとして現れるのは、洗練された分別ある男ホーナーであり、普通の人間の礼儀作法を表すのは、素朴な田舎娘マージェリーである¹⁹⁾と述べているが、それは正鵠を得ているであろう。成程、ホーナーの役割はこれより幅広いが、彼が劇作家の風刺の道具であるのは、確かである。「これが大部分墮落した世の有様である限り、ホーナーは作者同様に、風刺家である²⁰⁾とロナルド・バーマンが主張しているのは正しい。それは悪徳、愚行、偽善、嫉妬、および恥辱を暴露することが、登場人物としてのホーナーの役割であるからである。ウィチャリーは観客の眼前にいくつかの墮落した人間関係を据える。それらの人間関係は各々それ自体の破綻の萌しを包含していることを、劇のアクションは実証する。一旦動き出すと、その破綻のプロセスは不可避であるように思われるが、どの場合も始動するのにホーナーが必要である。サー・ジャスパーが妻の浮気を防ごうと用意する策の裏をかくのは、ホーナーである。マージェリーの欲求不満を公然たる反抗にまで至らすのは、ホーナーの求愛である。そして、マージェリーがホーナーのところへ逃げ出す方法が、結局スパークッシュの憤激を、それから彼とアリシアの婚約破棄を導くのである。

観客は他の登場人物たちと違って、ホーナーを道徳的角度から眺めるよう誘われることは、大詰め近くに至るまで一度もない。劇作家が自分のコメントをホーナーに向けることは決してない。というのは、ホーナーの行動が他の人物たちの正体を暴露するからである。彼らの墮落を観客に洞察させるのは、ホーナーのコメントである。

ホーナーには首尾一貫した性格づけがない。彼は劇作家の風刺の方法が変わるにつれて変化する。ある時点で、女性の美しさはウィットによるという理由で、ホーナーはピンチワイフが知的でない嫁を選んだことを批判する。その時、彼は女房に対するピンチワイフの墮落した態度を暴露するのに利用される。しかし、次の瞬間、ホーナー自身マージェリーを誘惑しようとしている。それというのも、劇作家の構想では、ピンチワイフは姦通されなければならないからである。ホーナーの性格づけの首尾一貫性のなさは、ウィチャリーによる風刺

の目論見の一部である。上演においては、首尾一貫性のなさは、まず気づかれないままであろう。何故なら、観客の道德意識は、ほとんど常にホーナーによって指示されるのであって、彼に対して向けられるのではないからである。

実は、ホーナーを没道德、即ち、とにかく道德とは無関係と見なすのが、多分一番よいであろう。彼は社会へのアプローチにおいて科学的であり、自説を適用し、その妥当性を証明する決意である。勿論、ホーナーは王政復古期の典型的な人物、即ち、冷笑家であり、才人であり、結婚を軽蔑する男である。そして、彼自身が言うように、「恋愛におけるマキアヴェリ主義者」(IV. iii. 69)であり、策士であり、二心ある男である。しかし、たとえ快樂主義者であり、好色家であるとしても、ホーナーは何よりも人生に対する態度において知的である。例えば、次のように、彼のウィットは彼が綿密な観察に基づいて物事を分析し、普遍化する心の持ち主であることを明らかにする。

I tell you, 'tis as hard to be a good fellow, a good friend,
and a lover of women, as 'tis to be a good fellow, a good
friend, and a lover of money. You cannot follow both,
then choose your side: wine gives you liberty, love takes
it away. (I. i. 222-226)

women are as apt to tell before the intrigue as men
after it, and so show themselves the vainer sex. (III. ii. 83-84)

ウィチャリーは多分ホーナーが真の才人、つまり、気取りがなく、自己と他者とははっきり理解しているので賞賛すべき人物であると意図したのであろうが、ホーナーの性格の滑稽なほど浅ましい面を率直に示しました。男女関係に対するホーナーの態度は、下劣である。彼は女性というものは軍人のように「誓いと契約によるよりもむしろよい報酬によって、忠誠を尽くす」(I. i. 465-466)ので、結婚するよりも困う方がましだ、と主張している。ホーナーは二

日で四人の女性とベッドを共にする。彼はどの女性に対しても情欲以上のものを感じない。

男性機能を失った男としてのホーナーの見せかけは、女性に対する彼の関心が専らその肉体にあることを強調するのに加えて、彼は普通の男以下のものであるということを象徴的に暗示する。つまり、実際は肉体的には申し分ないけれども、ホーナーは去勢された男のように、確かに愛の一部を欠いている。「ああ、私は夫にはなれない」(V. iv. 408)という彼の結末における宣言は、全くカムフラージュという訳ではない。ホーナーは結婚に至る愛に必要な感情と理想主義を抱けない。皮肉にも、この精力的な男は、陶器を買い求めたり、トランプで女性にインチキをさせたりすることに時間を費やさねばならないので、女性に利用されるという滑稽な立場に身をおく。女性たちが彼の陶器—実は彼の精力—を求めて競い合う場面(第四幕第三場)においては、彼は貪欲で飽くことを知らない女性たちが得ようと争う受動的な犠牲者になる。こうした点でホーナーは作者の風刺の対象にもなっていると言えよう。

しかしながら、『田舎女房』におけるホーナーの最も重要な役割は、他の人物たちを見事に操ることであり、彼自身楽しみ、他の人物たちの本性を明らかにし、彼らの気取りや弱点を通じて彼らを牛耳る。ホーナーはレディー・フィジェットと「貞淑な仲間」²¹⁾(V. ii. 96)の本性を暴露する。彼女たちは、自分たちの評判を傷つけることがありえない、性的不能ということになっている男と喜んで寝る。彼女たちの保護者もやはり、彼女たちが到底、不倫できないと考えられている男と一緒にいるのを見て喜ぶ。

ホーナーの振舞いは、王政復古期の伊達男たちにはショッキングでなかった反面、理想的でもなかった。というのは、王政復古期演劇の典型的な主人公は、恋をし、結婚することもできるからである。『田舎女房』においては、ホーナーの軽蔑する女性たちとの情事よりも遥かによい男女関係を実証するのは、ハーコートとアリシアである。最後に、観客はホーナーがマージェリーを守るために、アリシアに関して破廉恥な嘘をつく覚悟であると分かって、ショックを受ける。彼は「さて、別の女性のために一人の女性を中傷しなければならない。

しかし、それは何ら珍しいことではない。というのは、こんな場合、私は常に無実の者に逆らって、犯罪者の側につくからだ」(V. iv. 234-236)と言う。この態度は仰天するほど非礼である、と観客は思わざるをえない。従って、観客は女性たちが如何に偽善的であるかをホーナーが首尾よく証明するのを理解できるけれども、彼の利己主義やアリシアの評判への無関心を容易に受け入れられない。これはホーナーに対する観客の判断評価に関する限り、劇の重要な部分である。ここで、道徳的判断を避けることは不可能である。一定の距離を保てば、観客はこの生き生きした利口な男が社会の墮落を暴露したこと、彼はそうする間、感情的に巻き込まれないようにするに足るほど打算的であることが分かる。ホーナーは本質的に結婚に反対する反社会的人物である。そういう者としてホーナーは、閉幕前に観客の同情を幾分失うのである。²²⁾

とは言え、勿論、ウィチャリーはホーナーを厳しく批判したのではなかった。観客は主人公と、あるいはこの劇のアクションと一体化し、すべてが現実との直接的関連を持たない舞台上のイリュージョンであると理解しているはずである。観客は性的な罪が全部許される劇において、ホーナーの巧妙さを賞賛することになっているし、彼の放蕩にぞろとすることはないのであろう。²³⁾

ウィチャリーは『田舎女房』という劇を統一し、同時にバラエティー豊かにするために意味深いテーマを発見していた。それは王政復古期の社会における男女関係に浸透していた利己主義である。ウィチャリーは当時のロンドン社会に鋭い慧眼を向けて、都会の最も華々しい紳士たちは、漁色に耽る、つまり、妻とか恋人ではなく、娼婦としての女性を追い求め、一旦性衝動が満たされたら、女性を保持すべきものは何もなく、次から次へとセックスの相手を変えるということに気づいた。また、ウィチャリーは食べ物にする女性たちが愛について考えずに自分たちの情欲あるいは貪欲をしきりに満たそうとするということも知った。彼は当世の財産目当ての政略結婚のため、夫はまるで牢番のように振舞い、妻は貞操と忠誠心を捨てるのを厭わないということを知った。尤も、ウィチャリーは夫も妻も自分の性欲を偽善で隠すための伝統的な規律に依然、相当な影響を受けてはいたことも認識していた。

従って、『田舎女房』においてウィチャリーは愛と結婚に対する同時代人たちの態度のどこが間違っているのかを鋭く分析し、男女関係のもっと然るべき基礎を示唆した。²⁴⁾ 彼は自分のことだけに夢中な三人の男、つまり、商売一途の男サー・ジャスパー・フィジェットと、所有欲の強い夫ピンチワイフと、当世風だと気取って恋人に無関心なめかし屋スパーキッシュとを舞台に登場させる三つの相互に関連するプロットを通じてこれを行なった。彼らはそれぞれ一時的にせよ、永遠にせよ、自分の女性を失う。彼らとは対照的に、真に恋する唯一の男ハーコートがアリシアと、愛と尊敬に基づく結婚をする時、ウィチャリーは夫婦関係のあるべき理想を示唆した。ただし、ハーコートとアリシアの結婚にもかかわらず、『田舎女房』には我々が通常、喜劇にあるものと認める祝祭的解決がない。²⁵⁾ というのは、その結末のパロディー的な「寝取られ亭主たちのダンス」は、新しい、よりよい社会の誕生ではなく、古い社会の勝利を表しているからである。

ウィチャリーは上流社交界におけるウィットに富んだ放蕩者であるホーナーという主人公を通じて自分の風刺を鋭くし、統一した。自分のウィットによって、ホーナーは他の人物たちが自己の行為を理屈づけるのを露にする。自分は性的不能であると偽装することによって、彼は劇中の愚かな男たちの卑しさと、貞淑を装う女性たちの情欲を誘い出す。そして、王政復古期の社会における「名誉」の空虚さを暴き、性愛の過度の強調を示すのである。その際、作者ウィチャリーは偽善ぶりを除いて娼婦と変わらない上流婦人たちの浅ましさと、できるだけ多くの女性と寝ることが自分の性生活である放蕩者のさもしさを露呈する。こうして、ウィチャリーは嫉妬と気取りという、当時、愛好された嘲笑的的を力強く風刺した。それと同時に、興味深いことに、通例、理想として提示されたドン・ファンの卑しい、滑稽な面を示唆しもしたのである。

註

- 1) ホーナーにドン・ファンの性的性格を見出すアンソニー・カウフマンは、「ホーナーを『田舎女房』の主人公、この劇の道徳的規範、正しい行動の仕方や本当の男らしさの定義を

実証する才人であると思なすのは難しい。彼の世界観は病んでいる」と述べている。Anthony Kaufman, 'Wycherley's *The Country Wife* and the Don Juan Character', *Eighteenth-Century Studies*, 9 (1975-1976), 220.

これに対し、ロナルド・バーマンは、世の中が腐敗しているの、ホーナーの行動は正当化され、従って彼は揶揄の対象というよりもむしろヒーローであると主張する。Ronald Berman, 'The Ethic of *The Country Wife*', *Texas Studies in Language and Literature*, 9 (1967), 48. そして、ヴァージニア・バードサルは、「ホーナーは全く肯定的で創造的な喜劇の主人公である」と論じている。Virginia Ogden Birdsall, *Wild Civility: The English Comic Spirit on the Restoration Stage* (Bloomington: Indiana University Press, 1970), p. 136. また、ロバート・マークリーは、「劇作家がこの劇で成功を取めたのは、ウィット・コメディイというジャンルの領域を広げ、定義し直す喜劇の主人公を創り出したことにある」と指摘している。Robert Markley, *Two-Edg'd Weapons: Style and Ideology in the Comedies of Etherege, Wycherley, and Congreve* (Oxford: Clarendon Press, 1988), p. 159.

- 2) 『田舎女房』は様式上、笑劇、風刺喜劇、計略喜劇、ウィット・コメディイ、アンチ・コメディイ、ブラック・コメディイ、あるいはセックス・コメディイと呼ばれてきた。
- 3) 例えば、T. W. Craik, 'Some Aspects of Satire in Wycherley's Plays', *English Studies*, 41 (1960), 178-179 や Berman, *op. cit.*, 48参照。
- 4) ロуз・ズィムバードーは、ホーナーを社会の愚行と背徳を堪能もし、暴露もする「寄生者的風刺家」と呼んでいる。Rose A. Zimbaro, *Wycherley's Drama: A Link in the Development of English Satire* (New Haven: Yale University Press, 1965), p. 16.
- 5) “Horner”という名前は、“honour”の洒落であって、名誉の墮落を連想させる、とロバート・マークリーは指摘している。Markley, *op. cit.*, p. 159.
- 6) Harold Weber, *The Restoration Rake-Hero: Transformations in Sexual Understanding in Seventeenth-Century England* (Madison: The University of Wisconsin Press, 1986), pp. 68-69.
- 7) Craik, *op. cit.*, 179.
- 8) William Freedman, 'Impotence and Self-Destruction in *The Country Wife*', *English Studies*, 53 (1972), 422.
- 9) 『田舎女房』からの引用はすべてJames Ogden (ed.), *The Country Wife* (London: A & C Black, 1991) に拠る。
- 10) John T. Harwood, *Critics, Values, and Restoration Comedy* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1982), p. 106.
- 11) Thomas H. Fujimura, *The Restoration Comedy of Wit* (Princeton: Princeton University Press, 1952), p. 145.
- 12) John H. Wilson, *A Preface to Restoration Drama* (Cambridge: Harvard University Press, 1968), pp. 155-156.

- 13) Birdsall, *op. cit.*, p. 156.
- 14) Richard Steiger, "Wit in a Corner": Hypocrisy in *The Country Wife*, *Tennessee Studies in Literature*, 24 (1979), 60.
- 15) Bonamy Dobrée, *Restoration Comedy* (Oxford: Clarendon Press, 1924), p. 94.
- 16) Marvin Mudrick, 'Restoration Comedy and Later', *English Stage Comedy: English Institute Essays, 1954*, ed. W. K. Wimsatt, Jr. (New York: Columbia University Press, 1955), pp. 106-107.
- 17) Anne Righter, 'William Wycherley', *Restoration Theatre*, ed. John Russell Brown and Bernard Harris, Stratford-upon-Avon Studies, 6 (London: Edward Arnold, 1965), p. 79.
- 18) W. Gerald Marshall, 'Wycherley's "Great Stage of Fools": Madness and Theatricality in *The Country Wife*', *Studies in English Literature 1500-1900*, 29 (1989), 422.
- 19) F. W. Bateson, 'Second Thoughts: II. L. C. Knights and Restoration Comedy', *Essays in Criticism*, 7 (1957), 66.
- 20) Berman, *op. cit.*, 48.
- 21) 大抵の批評家は彼女たちを、ホーナーと観客が共に軽蔑を抱いて当然の偽善的な気取り屋として片づけるが、ハロルド・ウィーバーは、それに反論を試み、第五幕の「酒宴の場」を吟味することによって、彼女たちが社会的仮面と、大部分の他の人物たちに対して拒絶された自然な欲望との間の調和を達成するということを示唆している。See Harold Weber, 'Horner and His "Women of Honour": The Dinner Party in *The Country-Wife*', *Modern Language Quarterly*, 43 (1982), 107-20.
- 22) ジェイムズ・トンプソンは、「我々はホーナーがアリシアの評判と幸福を弄ぼうとする気であることに照らして、我々の忠誠心を再検討しなければならない。そして、『田舎女房』をウィチャリーの先行作よりもずっと豊かにするのは、このかなめの選択の瞬間である。実際、『田舎女房』をそのようなすばらしい劇にするのは、この厄介な大詰めである。この劇は特に明るいういットに富んだ計略喜劇から不快な転回をし、故意に観客を動揺させる」と述べている。James Thompson, *Language in Wycherley's Plays: Seventeenth-Century Language Theory and Drama* (Alabama: The University of Alabama Press, 1984), p. 71.
- 23) ジョン・ハーウッドは、「喜劇のアクションおよび劇的緊張を生じる者として、ホーナーは注意を引き寄せ、発覚と罰を避けるためのういットと抜け目ない知性に対するある種の賞賛を恐らく引き出すだろう。しかし、ホーナーは決して好ましい人物ではないし、まして愛すべき人物ではない」と否定的な見解を示している。Harwood, *op. cit.*, p. 108.
- 24) W・R・チャドウィックは、「ウィチャリーの主たる攻撃は、愛と結婚に対する一般的な態度の偽善性に向けられている」と指摘している。W. R. Chadwick, *The Four Plays of William Wycherley: A Study in the Development of a Dramatist*

(The Hague: Mouton, 1975), p. 119.

- 25) ジョン・A・ヴァンスは、『田舎女房』には楽しい解決がないということは、世の中は曖昧で、矛盾していて、挫折感を抱かせ、欺瞞的で、不安に満ちており、結局、混沌から現れるのは、往々にして混沌にすぎないのだ、という劇作家の信念を強調する」と述べている。John A. Vance, *William Wycherley and the Comedy of Fear* (Newark: University of Delaware Press, 2000), p. 129.